

# 海陽町の漁業慣行と変遷

民俗班（徳島地域文化研究会）

磯本 宏紀\*

**要旨**：漁業は、海と関わる生業であり、社会経済的側面、技術的側面、精神的側面からの総合的なアプローチが必要である。小稿では、海陽町における漁業経営の概要、漁法の変遷、漁業に関わる漁業者の環境認知の変化について概説した。

**キーワード**：漁業、漁法、環境認知、漁業経営

## 1. はじめに

徳島県海部郡南部に位置する海陽町には3つの漁業集落がある。浅川、鞆浦、宍喰である。小稿は、これらの地域を対象として、漁業経営の概要を示し、漁業慣行の変遷について報告することを目的とする。

なお、小稿作成にあたり、これまでに蓄積された漁業に関する報告書等を参照した上で、現況に関する統計の分析、聞き取り調査を実施し、変遷を把握するものとした。

以降、小稿は、「2 漁業経営体と漁法の概要」「3 漁法の変遷」「4 漁業と環境認識」の順で構成する。

## 2. 漁業経営体と漁法の概要

農林水産省「漁業センサス2018年」（以下「漁業センサス」）（徳島県政策創造部 統計データ課、2020）のデータにもとづき、特色ある数値にもとづき表1を作成した。「漁業センサス」から以下の点を指摘できる。

浅川地区は、鞆浦地区、宍喰地区に比べ経営体数

が少なく、動力漁船数が少なく、排水トン数の小さい船が多い。

3地区ともに「個人経営体」による漁業経営が中心であるが、宍喰地区では4経営体による「会社」、鞆浦地区では「漁業生産組合」と「共同経営体」による漁業経営体がある。宍喰地区の場合、「近海まぐろはえ縄」の経営体が、鞆浦の場合、「定置網」の経営体の一部がこれに相当すると考えられる。

3地区ともに「その他の刺網」「その他の釣」に関わる経営体が多い。浅川、宍喰の両地区では「その他の刺網」を大半の経営体が営んでいる。「その他の釣」についても、3地区とも多数の経営体が営んでいる。なお、「その他の刺網」はイセエビや底棲魚を漁獲する底刺網漁、「その他の釣」とは、各種一本釣漁を指すと考えられる。

この他、浅川地区の「採貝・採藻」が20経営体と多い。アマシ（海土）による素潜り潜水漁によるアワビ、ヒロメ等の漁を指す。鞆浦地区では「大型定置網」が営まれる。宍喰地区では「沿岸いか釣」が突出した経営体数である。

\* 〒770-8070 徳島市八万町向寺山 徳島県立博物館 088-668-3636

表1 海陽町域の漁業経営概要

		浅川	鞆浦	宍喰
漁業経営体（経営体）		32	52	59
動力漁船	隻数（隻）	24	48	64
	トン数（トン）	77.4	243.0	304.0
経営組織別経営体数	個人経営体（経営体）	31	48	55
	会社（経営体）	—	—	4
	漁業生産組合（経営体）	—	1	—
	共同経営体（経営体）	—	3	—
	その他（経営体）	1	—	—
営んだ漁業種類別経営体数	その他の刺網（※注3）	22	18	46
	大型定置網	—	1	—
	小型定置網	8	14	11
	その他の網漁業（※注4）	1	10	4
	近海まぐろはえ縄	—	2	4
	沿岸まぐろはえ縄	—	1	—
	その他のはえ縄	—	5	4
	沿岸かつお一本釣	1	1	—
	沿岸いか釣	—	3	31
	ひき縄釣	1	18	—
その他釣	その他の釣	14	23	14
	採貝・採藻	20	4	7
	その他の漁業	5	7	15

※注1 徳島県政策創造部 統計データ課（2020）により作成した。

※注2 「漁業種類別経営体数」は海陽町域の各地区の特色ある項目を抜粋した。また、同一の経営体が複数の漁業種に従事することもあるため、総和が「漁業経営体」数と一致しない。

※注3 「かじき等流し網」以外の刺網を指す。

※注4 「底びき網」「まき網」「刺網」「棒受網」「定置網」以外の網漁業を指す。

### 3. 漁法の変遷

たとえば、鞆浦地区では、現在次のような漁業暦で漁をする。

3～4月	カツオの一本釣、ひき縄釣
5月	モジャコ網（魚群が来れば）
6～7月	シイラ（ウマビキ）釣
9月15日～5月頃	タテアミでのイセエビ漁
11月～1月	夜間のスルメ釣
12月～3月	ヒラメ刺網
2月～3月	メジカ、ソウダガツオ釣
この他	ほぼ年間を通じて定置網からの漁獲があ

る。

漁法には盛衰がある。たとえば、昭和40から50年頃に太平洋でのモジャコ捕りがさかんに行われた。養殖し、稚魚として育てた上で、養殖用のブリの稚魚として当時は鳴門市北灘地区等を中心に出荷した。

それ以前の昭和35年頃までは7軒の網元（大船頭）がいた。昭和20年代からはバッチ網（2そう曳船曳網）でカタクチイワシ漁がさかんになった。春から秋までの間、シラス（稚魚）やイリコ（カエリ、コバ、チュウバ、オオバ等大きさに合わせて名称が

異なる）を捕り、加工、出荷したり、カツオ漁等のエサとして売ったりしていた。沖合・遠洋のカツオ漁、マグロ漁も多く、地元の若者が船員となっていた。各地区には本節（枯ぶし）を製造する家もあった。カツオだけではなく、サンマの節も作っていた。また、昭和30～40年代には素潜りによるテングサ漁もさかんに行われた<sup>(1)</sup>。

鞆浦地区には「大敷網」と呼ばれる大型定置網があり、組合により経営されている。これは、「大正13年には、高知県野根村の岡初夫等より鞆浦漁業組合に対して、ブリ大敷網敷設の申し入れがあり、翌14年よりバッヂ網元組7家も加入して高知資本との合同による轟水産大敷組合の発足をみた。同組合は、昭和9年に漁業組合の自営＝村張り経営へと移行した後も水揚げはよく、かなりの成績をあげた。初年度の配当1株80円、3年目は大漁で400円であった」(海部町教育委員会, 1976: 283-286)とされる。大正期に高知県の野根から導入したものであること、バッヂ網の網元等が参加して組合を組織し、経営が行われていたことがわかる。

宍喰地区でも、マグロ延縄、カツオ一本釣と節づくりが漁業の中心となっていた時期があった。秋にはサンマ棒受網で北海道沖まで出漁していた。これに昭和40年代頃からモジャコ養殖が加わった。5月に沖合に出漁し、モジャコを捕った。イカ・イセエビ・カツオ・マグロが魚種の中心であった。また、網の変遷については、昭和20年代までは巾着網（アグリ網）による夜網でカタクチイワシ漁をしていたが、バッヂ網に切り替わった。それ以前にはハチダ網（4隻で網を張る敷網の一種）でカタクチイワシを捕っていた。主にカツオ用の餌として売るためである（井之口, 1979: 64-73）。

#### 4. 漁業と環境認知

漁業者にとって海上での位置を知り、波、風、天候の変化を察知することは重要である。もちろん、GPS、魚探、天気予報等これらに替わるテクノロジーがあるが、実際には自らによる環境認知と機械等によるテクノロジーを併用する<sup>(2)</sup>。

沿岸での位置を把握するためにヤマアテをする。手前の山等の目印と、遠くに見える山等の目印の重

なり具合によって海上の位置を特定する。さらに、その位置に対応した海底環境の知識を重ね合わせて適切に漁具・漁法を使う。

風にも名前がある。マゼ：南風、コチ：沖の海上からの東風、ナライ：北風、ニシカゼ：西風、マナゼカゼ：北西風等である。「マナゼカゼは日和が長持ちしない」「冬のニシカゼは日和が長持ちするが、春のニシカゼはすぐに日和が悪くなる」「昼に沖風が東から吹いてくるときは上等な日」といった経験測にもとづく言いまわしがある。

あるいは、潮についても同様で「ノボシオ（上り潮）」といって潮が上に行くと大漁ができるが、大阪の方から流れてくる潮、つまりクダシオのときは魚は捕れない」とされる（井之口, 1971: 69）。

こうした環境認知に関しては、文献中で確認できるものと、聞き取り調査で確認できる内容ではズレがある。この点は、環境認知の変化を示していると言える。各種テクノロジーを利用することになった現在、不要になった環境認知と、それでも必要な環境認知がある。あるいは、新たに必要とされるようになった環境認知があるかもしれない。

#### 5. おわりに

小稿では海陽町域の漁業概要と変遷について、聞き取り調査及び文献調査により確認した。紙幅の都合から記述できない内容も多く、その点での詳述、論述は別の機会にゆずるものとする。

今後の課題と展開をあげるなら、漁法、環境認知における変化、変遷の実態を把握することである。機械化やテクノロジーの導入と民俗知識の関係性の把握は、重要な論点になろう。

#### 謝辞

聞き取り調査では、次の方がた、団体にお世話になった。ここに記してお礼申し上げたい（五十音順）。浅川漁業協同組合、奥村猶美氏、貝塚充章氏、宍喰漁業協同組合、鞆浦漁業協同組合、中田憲次氏、浜部泰衛氏

#### 注

(1) 井之口（1979）の「漁業」によった。

(2) 卯田 (2003) 等の研究があるが、いまだ十分に体系化されていない領域である。

#### 引用文献

井之口章次編 (1979) 『民俗採訪 徳島県海部郡宍喰町、静岡県磐田郡龍山村』國學院大學民俗学研究会。

卯田宗平 (2003) ヤマアテとGPS—技術を越境する漁師たち。  
篠原徹編『現代民俗誌の地平1 越境』朝倉書店：169-190。

海部町教育委員会編 (1971) 「海部町史」海部町教育委員会。

徳島県政策創造部 統計データ課編 (2020) 『漁業センサス2018年漁業地区別一覧表』徳島県の統計情報<https://www.pref.tokushima.lg.jp/statistics/year/fc/> (2020年9月29日閲覧)。

---

Fishery practices and change in Kaiyo Town, Tokushima Prefecture

ISOMOTO Hironori\*

\* Tokushima Prefectural Museum, Mukouterayama Hachiman-cho, Tokushima 770-8070, JAPAN

Proceedings of Awagakkai, No.63 (2021), pp.41-44.